

# ヘレニズム時代の文化の交流・融合

友村恭子

ヘレニズム時代、すなわち、アレクサンドロス大王の死の年（323 B.C.）からアクティウムの戦い（31 B.C.）までを指す時代は、古典期のポリスの枠が崩壊して、多種多様な民族の交流・融合のあった時代であるが、この研究では、特に「論理学」のあり方に焦点を合わせる。

古典期、すなわちプラトンやアリストテレスの時代も、アテナイの民主政治が民衆扇動家の弁舌に左右される民衆の多数決制度のもとで混乱し、またペロポネソス戦争の動乱の中で二大ポリスのアテナイ・スパルタの狭間にあって、弱小ポリスが動揺した時代であって、その中で「言論」（ロゴス）というものが信用できなくなり、他方、「力は正義なり」の信条が、特に新進の政治家の間でまかり通っていた。その中で、プラトンは互いに相容れない信条を鉄則とする個人や集団の間で「互いの大前提を反省し、特殊な世界観から普遍的な価値の発見のための方法」としての「問答法」（*dialectike*, 弁証法の語源）の方法を定着させて行き、他方、アリストテレスはむしろ生物学を足場とし、類・種の厳然たる秩序があるとの発想から、「古典形式論理」の基礎を固めた。

ところがヘレニズム時代には、きわめて興味深い展開が見られることになる。まず、プラトンでは、対話のためには言語の共有が不可欠だという前提があったが、ヘレニズム時代では、例えばストア派は「言語にたぶらかされるな」という観念が支配的となり、「真にあるもの」と錯覚との区別は、「言葉」ではなく達人の洞察力が識別するものだという考えが主張されるようになる。そして、アリストテレスの「類・種」の厳然たる区別に代わって、四元素ですら、相互に全面的に融合し合うという観念が支配的となって、全面的相互浸透・融合の観念は、例えば、ストア派の影響を受けたガレノスの医学説での重要な基礎理論となる。そして、論理学においても、静的な類・種の包含関係に代わって、生起する事象を命題に置き換えての「命題論理学」が展開されることになる。この研究は、そうしたヘレニズム時代の論理学のあり方や、それと医学説・政治理論・倫理学などとの不可分の関係を考察したものである。